

小説部門選評

選評

坂上 弘

受賞作「ログアウト」の主人公のように、オンラインワールドに熱中する中学一年生は珍しくないが、その幼い自分を見つめる真剣さをえがこうとする作品は、多くはないだろう。父、母、姉のその下という四人家族のなかでのびのびできる彼女は、ドリムトリップというゲームで、友達と外国旅行したり、もう一つの興味ぶかい接続世界といえる地元新聞の投書欄にも投稿をはじめている。こうした感受性ゆたかな主人公の成長を描く試みは、いわば、ストーリーイ・オブ・イニシエーションと呼べるだろう。この主人公を未知の衝撃からまもっているのは、落着いた家庭であり、作者は、季節の花々を育てる庭回りや季節のキャンペーンといった落着いた日常をつくって、主人公の成長を見守る爽やかな絵のように添えている。

佳作の「息子」は、定年ホヤホヤの男達の夜警の仕事光景からはじまる。一日おきの十四時間勤務で、淡々とした、しかしバクゼンとも足らない生活。銭湯につきり、パチンコで軽く遊び、図書館から借りた本を読む。息のつまるような、「新定年人」の典型的な光景である。日常とはいってみればこうしたコンクリートのような時間である。それを破るためかのように、彼は、東京で一心に働いているはずの一人息子に会いに行くことにする。息子はどうかやって生きていくか、また父を受け入れてくれるのだろうか。

同じく佳作「バースデイケーキ」の主人公は、前述の「息子」の主人公の年齢を二回りも越えた世代になっているが、子育ても親の介護という責務もおえて、自らを飄々とふりかえっている。そして人と人とのつながりある物語に構築しようとしている。

感想

佐伯 一 麦

受賞作「ログアウト」は、ドリムトリップというオンラインゲームに熱中している女子中学生を主人公とした話で、ゲームに疎いこちらにもプレイの詳細が把握できるように巧みに描かれていて興味を抱かされ、現実世界と仮想世界との出し入れがテンポよく運ばれていくので一気に読まれた。主人公はまた、コミュニケーションを取ることが苦手な悩みを地方新聞に投稿し、それに対してネット上で批判にさらされたりもする。モチノキの「時の流れ」という花言葉を知り、よい意味で（今の自分は、時にうまく流されてる）と感じる主人公の述懐は、（時に流されてまい）と意志してきた旧世代からすれば新鮮に映り、学校でも家庭でも葛藤を避けようとする現代の若い世代の生の気分、友人や家族との関わり合い方がリアルに捉えられているように感じられた。広く読まれて、様々な読者の感想を惹き起こして欲しい、という願いも込めて受賞作とすることに賛成した。

佳作の「息子」は、生活を切り詰めて生きている現代の人々の切実な生活感情が、それに見合った淡々とした会話を活かした文章で描かれていて、余韻の残る作品だった。妻を早く亡くし、ときに母親代わりとなりながら男手一つで息子を育てたのであろう六十代の男性の心情に胸が熱くなった。もう一つの佳作「バースデイケーキ」は、訳あって田舎暮らしをしている老夫婦と、そこを訪ねてくる孫娘とのやりとりがユーモラスに生き活きと描かれ、古来、落人が隠れ住んだ僻地の歴史と、そこへ逃れてきた主人公の経緯とが物語に陰翳を与えていた。

選考を終えて

長野まゆみ

中学生の主人公を語り手とする「ログアウト」が受賞作に選ばれた。若い世代が直面する繊細かつシビアな人間関係をテーマとする。彼らは常に相手を気遣い、傷つけず、波風を立てない高度なふるまいかたを求められている。その気力、努力をほかのことに向けたいと思う主人公は「友だち作り」にあえて参加しない。幸い、家族関係は良好である。やがて、主人公は世界を旅しながらポイントを稼ぐオンラインゲームに熱中する。そこは生身のつきあいが無いぶん、悩みごとを相談できる場でもあった。現実の世界と架空の世界を対比させつつ描く困難に、果敢に挑んだ意欲が評価された。

佳作の「息子」の主人公は妻に先立たれ、男手で息子を育てあげた。定年後、夜警として働く彼は、都会で暮らす息子を訪ねてゆく。父子水入らずの時を過ごしたのち、息子には内緒で別の宿にもう一泊し、ひそかに息子の出勤姿を見届ける。そこに疑いや謎は存在しない。ただ、息子が都会を離れないだろうと思う父親をしみじみと描いた。同じく佳作の「バースデイケーキ」はワケあって限界集落で老いることになった夫婦の日常。哀しみも喜びも、もはや記憶でしかない二人の前途は厳しいが、ユーモアを交えた筆致に救いがあった。